

## ルカによる福音書11章「神の国に反対する者」

### 1A 祈りについての教え 1-13

1B 祈りの内容「御国が来ますように」 1-4

2B 祈りの姿勢「求めなさい」 5-13

### 2A 群衆からの反対 14-54

1B 証しに対する誹り 14-28

1C 確かな証拠 14-16

2C サタンの内輪もめ 17-23

3C 掃除された家 24-26

4C 従順なしの祝福 27-28

2B 悪い時代 29-36

1C しるしを求める時代 29-32

2C 体の明かりである目 33-36

3B パリサイ派と律法の専門家 37-53

1C 外側だけを清める者 37-44

2C 自分だけを無罪とする者 45-52

3C 激しい敵意 53-54

## 本文

ルカによる福音書 11 章を開いてください。私たちは、前回、弟子としての生き方として、愛の行いと、御言葉に聞く姿勢について見ました。良きサマリア人から、私たちの愛が枯渇した時にこそ、キリストの愛に満たされて初めて、憐れみの行いをすることができることを見ました。そして、だからこそ、マリアのように最も優先すべきこと、すなわち御足の元で御言葉を聞くことがあるのだということです。神との関係性のことです。

### 1A 祈りについての教え 1-13

そして次に、弟子たちに祈りの必要性を教えられます。キリスト者として生きるのに、自分の力ではどうしようもないというところから出発します。ゆえに、自分を低くし、主にひざまずき、願いを申し上げますということはとても大事です。

### 1B 祈りの内容「御国が来ますように」 1-4

1 さて、イエスはある場所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

イエス様が祈っておられた時に、弟子たちのほうから祈りについて教えてくださいとお願いしています。これまで私たちは、イエス様がしばしば祈られているところをルカによる福音書で見つけてきました。イエス様が祈られているのは、弟子たちにとってはよく目にしていた光景だったのでしょう。主は、祈りについて教えられただけでなく、ご自身祈られていた方だということです。私が、また皆さんが人から見て、「この人は祈っている人だ」と思われているかどうか問われます。

2 そこでイエスは彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。3 私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください。4 私たちの罪をお赦しください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。私たちを試みにあわせないでください。』」

祈りの目的が、ここにはっきりと書かれています。「父よ」と呼びかけていますね。祈りは、父なる神との人格的な関わりを持つ時間です。初めに呼びかけて、それで時間を過ごすというのが祈りの醍醐味です。それから、「御名が聖なるものとされますように」とのことです。父なのですから、この方をまず敬うのです。「聖なるもの」というのは、すべてのことについて、父なる神の名が他のどんな名とは異なり、あがめられるようになりますように、ということです。そして、「御国が来ますように」です。人が罪を犯して、サタンにその支配権が移されてから、この世はサタンの国になっています。しかし、キリストが来られて神の支配に全てのものが下に入ることを神ご自身が願っておられます。このように、祈りの目的は神を父として見上げ、交わることにあり、自分のことではなく、神ご自身の名が、そして人間中心の世界ではなく、神の国が来ることを願っています。

それから、自分たち自身に関わることを祈ります。初めは日々の糧が与えられるようにという祈りです。当時のイスラエルは今よりはるかに貧しかったです。この祈りは切実でした、私たちは逆に日々の糧が当たり前で与えられているのではないということ、感謝します。そして、赦しについても神は優先順位を上げて祈らせませす。神が私たちを赦されたので、私たちの間には赦しの文化がなければいけません。そして、試みに合わせないでくださいということですが、これは、神の国が訪れるということは、悪魔からの攻撃があるということです。戦いの中に生きているので、試みからの救いを私たちは絶えず祈るべきです。ですから、日々の糧、互いの愛と赦し、そして試みからの救いです。

## 2B 祈りの姿勢「求めなさい」5-13

5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうちのだれかに友だちがいて、その人のところに真夜中に行き、次のように言ったとします。『友よ、パンを三つ貸してくれないか。6 友人が旅の途中、私のところに来たのだが、出してやるものがないのだ。』7 すると、その友だちは家の中からこう答えるでしょう。『面倒をかけないでほしい。もう戸を閉めてしまったし、子どもたちも私と一緒に床に入っている。起きて、何かをあげることはできない。』8 あなたがたに言います。この人は、友だち

だからというだけでは、起きて何かをあげることはしないでしょう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしょう。9 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。10 だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。

午前礼拝でお話したところですが、私たちが祈りにおいて大胆にならないといけないことを教えています。友達であっても、しつこく頼めばいうことを聞いてくれるのだから、なおさらのこと神に求めれば、神はその願いを聞いてくださるということです。ここで大事なものは、その願いというのは主の御心を求めていること、神の国が来ますようにということ、また日々の糧や、赦しや、そういった神の御心にかなったことに沿っている願いであります。

11 あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるでしょうか。12 卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

ここでは、主は私たちに良い賜物を与えてくださるということです。私たちに悪くされることはない、必ず良い賜物を与えてくださり、そしてその最良の賜物は聖霊ご自身であるということです。午前礼拝でお話ししました、イエス様が聖霊の力によって宣教を行われ、聖霊にあって父なる神と交わりました。その御霊が、私たちキリストを信じる者たち一人一人にも注がれます。

## **2A 群衆からの反対 14-54**

そしてイエス様は、その聖霊の力によってご自身がキリストであることを示されていきますが、14 節以降にて、その究極的な証拠を拒んでいく群衆の姿を見ていくこととなります。私たちは、自分が弟子として生きていくことを決めると、必ずや抵抗勢力が起こされるということを知る必要があります。霊の戦いが始まります。

### **1B 証しに対する誹り 14-28**

#### **1C 確かな証拠 14-16**

14 さて、イエスは悪霊を追い出しておられた。それは口をきけなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口がきけなかった人がものを言い始めたので、群衆は驚いた。15 しかし、彼らのうちのある者たちは、「悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。16 また、ほかの者たちはイエスを試みようとして、天からのしるしを要求した。

ここで、イエス様が行われていた悪霊の追い出しは、これ自体がキリストが来られたことを証しているものでした。「口をきけなくする悪霊」であります。ユダヤ教の中にも悪霊追い出しがありま

したが、その時は、イエス様がレギオンに対して行なわれたように、その名を聞き出します。それが悪霊を追い出す時の対決の方法でした。ところが口が聞けないのですから、どうやって悪霊を追い出せばよいのか分かりません。それを行われているということは、ここで群衆が驚いているとあるように、大きな形で神が訪れていることを示すものです。それから、イザヤ書において、神の国が到来する時に、口のきけない人が喜び歌うという預言があるのです。「35:6 そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水が湧き出し、荒地地に川が流れるからだ。」

そして、これは聖霊の力によって行われているのは明白でした。今日は学びませんが、次の章、12章で「聖霊を冒瀆する者は赦されません(10節)」とあります。ですから、聖霊の働きによって、イエスコそが主であり、救い主であり、私たちの支配者、王なのだということが、これほど明らかになったことはなかったのです。

ところが、この証しを拒んだのです。二つの方法で拒みました。一つは、悪霊のかしら、ベルゼブルのせいにしたのです。これほどの力がイエスに与えられていることについて、それは神からきたものなのだとするのではなく、悪のほうで最も力ある者、ベルゼブルのせいにしたのです。そして、もう一つは、「天からのしるし」ですが、悪霊を追い出すということは地上での徴であり、しかし天からの徴がなければ、信じられない、というものです。これもまた屁理屈であり、「ここまで明らかにされた光に対して、それをも拒むとどういうことが起こるのか？」ということなのです。天からのしるしについては、29節以降でイエス様はお答えになりますが、初めにベルゼブルによって追い出しているという言葉から、語り始められます。

### 2C サタンの内輪もめ 17-23

17 しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「どんな国でも内輪もめしたら荒れすたれ、家も内輪で争えば倒れます。18 あなたがたは、わたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出していると言いますが、サタンが仲間割れしたのなら、どうしてサタンの国は立ち行くことができるでしょう。19 もし、わたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているとしたら、あなたがたの子らが悪霊どもを追い出しているのは、だれによってなのですか。そういうわけで、あなたがたの子らがあなたがたをさばく者となります。20 しかし、わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」

イエス様が、「御国が来ますように」と祈りなさいと言われましたが、主が行われていることは、まさにサタンの国の中に、神の国をもたらしていることそのものでした。人が救われるということは、暗闇の支配から解放されて、御子の支配に移ることそのものです。「使 26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。」私たちの肉

眼では見えていませんが、このような激しい、熾烈な戦いが起こっていて、一人の人が神に立ち返るということは、サタンが天から落ちるような、神の勝利が起こっているということなのです。

そこでイエス様は彼らの言っていることが、いかに屁理屈で、理にかなっていないかを語っておられます。一つに、「仲間割れ」です。一つの国の中で仲間割れすると、国は分裂します。今の朝鮮半島がそうですね。今、あそこに二つの主権国家があるわけではありません。北の朝鮮民主主義人民共和国は、南の釜山までが自国であると主張しています。南の大韓民国は、北の中国との国境、豆満江までを大韓民国としています。38度線は、あれは休戦ラインであり国境線ではありません。主権が二つあることは存在しえないのです。もう一つは、ユダヤ教の中でも悪霊の追い払いがありました。ですから、彼らをも中傷していることとなります。

そして、「神の指によって悪霊どもを追い出している」というのが大事です。ここの「神の指」というのは、イエス様は明確に出エジプト記にあることを話しておられます。ファラオによって支配されているエジプト国があります。しかし、イスラエル人は神の民です。だから、出ていかせなさいと主は命じられているのにファラオは、頑固として行かせません。そこで主は、エジプトで神々と呼ばれているものに対して災いを下し、ご自分の力を現しました。ナイル川が血になりました。かえるが出てきました。地の塵をぶよに変えました。

ところで、エジプトに、モーセとアロンに対抗した者たちがいました。魔術師たちです。彼らは、アロンの杖が蛇に変わったのを、自分たちも杖を蛇に変える徴を行いました。またナイル川を血に変えるのを、自分たちも水を血に変えるしるしを行いました。かえるも這い上がらせました。しかし、地の塵をぶよに変えた時に、魔術師は真似することができなかったのです。家畜や獣にぶよが付き、自分たちにも付いていたでしょうが、「これは神の指です。(出エジプト 8:19)」と言いました。神の国がサタンの国に攻め入り、勝利している分岐点でありました。それと同じように、イエスが地上で宣教の働きをされたその実体は、霊の戦いそのものであります。神の国が、悪魔の国に攻め入っているのです。

21 強い者が十分に武装して自分の屋敷を守っているときは、その財産は無事です。22 しかし、もっと強い人が襲って来て彼に打ち勝つと、彼が頼みにしていた武具を奪い、分捕り品を分けます。23 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしとともに集めない者は散らしているのです。

ここで大事なものは、「強い者」と「もっと強い者」の対比です。出エジプトにおいては、強い者とはファラオでした。彼がエジプトを治めていたので、そこは安定していました。イスラエルは奴隷状態でありましたが、それでも安定していたのです。けれども、モーセがやってきたのです。モーセについておられるイスラエルの神は、ファラオに対してもっと強い者であられたのです。それで、イスラエルの民を分捕り物とし、またイスラエルの民自身も、エジプトの金銀を彼らから奪い取りました。

それと同じように、サタンが強い者で、キリストはもっと強い者です。今、キリストが奪い返しておられるのです。悪霊につかれていたものを解放して神のものとしていけられました。

ですから、ここで大事なのは、「どちらの頭についているか？」ということなのです。多くのキリスト者が、自分の信仰のゆえに問題や対立が起こると、自分で何とかしなければいけないと思います。いいえ、そこが大事なのではなく、自分がイエス様にさらに忠誠を尽くすことが大事なのです。心の中でキリストを主とあがめることこそが大事なのです。キリストが、その反対する力に対して、もっと強い方なのです。

その時に、してはならないことがあります。どっちつかずになることです。それで 23 節でイエス様は、ご自身に味方しなければ敵対し、ご自身と共に集めなければ散らしているとはつきとさせています。何か二つに分かれるようなことが起こると、自分は中立にならないといけなと思います。けれども、霊の戦いの本質をわきまえていません。もし、自分、あるいは自分の近くにいる兄弟が、神のみこころを行っているのであれば、そうではない人との間を取り持つことはできないのです。「Ⅱコリ 6:14-15 不信者と、つり合わないくびきをともしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。」むしろ、神の働きを壊してしまうのです。そういう時は、横の調節をするのではなく、まっすぐに神を見上げてください。自分自身が頭につく、中世を誓うべきキリストについている、ということでありませう。

### 3C 掃除された家 24-26

24 汚れた霊は人から出て行くと、水のない地をさまよって休み場を探します。でも見つからず、『出て来た自分の家に帰ろう』と言います。25 帰って見ると、家は掃除されてきちんと片付いています。26 そこで出かけて行って、自分よりも悪い、七つのほかの霊を連れて来て、入り込んでそこに住みつきます。そうすると、その人の最後の状態は、初めよりも悪くなるのです。」

これは、汚れた霊の活動の一貫を示しています。「水のない地」とありますが、聖書には、荒野や荒廃したところに悪霊どもが住むことが記述されています。そして見つからなかったのも、自分が追い出されたところに戻って見たら、なんと家はきちんと片付いていたとあるのです。これは何を意味するか？主人がおらず、がら空きだったということです。それで他の悪霊どもを連れて来て、もっと初めより悪い状態になるということです。

その時代のイスラエルの姿をイエス様は語られています。このように、ユダヤ人の多くから悪霊を追い出されました。けれども、その肝心な、追い出した人、強い人であるキリストご自身を受け入れませんでした。すると、さらに悪い状態になるということです。ローマの圧政に苦しんでいたユダヤ人ですが、肝心のキリストを受け入れなかったのも、紀元後 70 年にローマにエルサレムを破

壊され、世界に離散する民となってしまいました。

ここでいかに、キリストを主として生きなければいけないかが分かるかと思います。イエス様は、弟子たちには、悪霊が従うことよりも、天に名が書き記されていることを喜びなさいと言われましたが、それと似ています。いくら、主によってもたらされる解放や癒しが与えられても、主ご自身を主とした生活をしていなければ、神に従っていなければ、もっと悪い状態になってしまうのです。

#### 4C 従順なしの祝福 27-28

27 イエスがこれらのことを話しておられると、群衆の中から、ある女が声をあげてイエスに言った。「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです。」28 しかし、イエスは言われた。「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」

ルカによる福音書は、女性が多く登場しますが、ここもそうですね。群衆の中から、ベルゼブルの話が出て来て、イエス様は強く警告されましたが、その緊張した状態を宥めようとしたのでしょうか、イエス様のことを祝福しようとしています。「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです。」とは、いかにも女性らしいですね。けれども、イエス様はきっぱりと、「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」と言われました。

幸いですと祝福することよりも、御言葉に従順になって、ということです。しばしば、自分自身は主に従っていないのに、クリスチャンを「すばらしいですね」とほめることがあるかと思います。そういった人間的なほめことば、そのお気持ちはすばらしいですが、まことの幸いというのは、イエスご自身に自分を全て明け渡すことに他なりません。イエスを主とすることです。

#### 2B 悪い時代 29-36

イエス様のところには、さらに多くの群衆が集まってきます。一見、それはすばらしいように見えます。けれども、イエス様は厳しい見方をしておられました。イエス様を求めているようで、神を求めているようで、実は心は違うところにあったのです。このようなことをしていれば、今、主が警告されたように、もっと悪い状態になってしまいます。

#### 1C しるしを求める時代 29-32

29 さて、群衆の数が増えてくると、イエスは話し始められた。「この時代は悪い時代です。しるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし、ヨナのしるしは別です。30 ヨナがニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。」

先に、天からの徴を求めていることが書かれていましたが、今ここで、イエス様はそのことにお応えになります。「悪い時代」だと言っています。口をきけなくする悪霊を追い出したという聖霊の働

きがある中で、この方こそがキリストであるというあまりにも明白な徴があるのに、それでもさらに徴を求めているのですから、それは拒んでいることに他なりません。ですから、徴はないときっぱりと断っておられます。けれども、「ヨナのしるし」とありますが、ヨナは三日の間、魚の中にいて、そこで陰府を経験して、そして魚から出て来て生還しました。同じように、残された徴は、人の子、主ご自身が墓に三日間、葬られ、そして甦られることです。

31 南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります。32 ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし見なさい。ここにヨナにまさるものがあります。

ヨナが説教したニネベの人たちも、そして南の女王も、どちらも異邦人です。初めに、南の女王について説明しますと、彼女はシェバという、今のイエメンでしょうか、アラビア半島の南部にあったところからはるばる、エルサレムのソロモンに謁見に来ました。なぜなら、ソロモンには知恵があることを聞いていたからです。ソロモンの知恵を聞いて、彼女はソロモンの神がおられることを知り、神をほめたたえました。つまり、神を知ろうとするその飢え渴きが彼女にはあったということです。しかし、イエス様は、ここにソロモンよりもすぐれた者がいると言われます。ソロモンは神の知恵を証していましたが、イエス・キリストは神の知恵そのものであります。

「この時代」という言葉を、イエス様はよく使われますが、それは、旧約時代に約束されていた方ご自身が、今、ここにおられるその方に会う時代ということです。世代と訳すと良いかもしれませんが、メシアが来られたユダヤ民族の世代ということでもあります。

そしてヨナの時代に戻りますと、アッシリヤの首都ニネベで、ヨナの説教を彼らは聞きました。「あと四十日すると、ニネベは滅びる。(ヨナ 3:4)」とだけヨナは言いました。悔い改めなさいという言葉も何もない、あまりにも不親切な、希望のない絶望の言葉です。ところが、ニネベの人たちは、王から一般の民に至るまで、荒布をまとして灰をかぶり、ひたすら神に願って、悪い道を悔い改めようとしていました。すると神は思い直されたのです。そして今、預言者ヨナよりも優れた方、つまりヨナが指し示していたキリストご自身がここにおられます。

これら異邦人が悔い改めたのに、肝心のイスラエル人が、キリストご自身が現れたのに拒むということは、いうなれば、レストランの食材の余ったものを捨てようと思ったら、お腹の空いていた人が食べにきたけれども、シェフが時間をかけてこしらえた料理を食べもしないで、「もっと良いのはないのか！」と文句を言っているようなものです。



## 2C 体の明かりである目 33-36

ですから、これまで与えられている神の知識、その光に応答しなさいとイエス様は言われています。そこで次に主は次のことを語られます。

33 だれも、明かりをともし、それを穴蔵の中や升の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。入って来た人たちに、その光が見えるようにするためです。34 からだの明かりは目です。あなたの目が健やかなら全身も明るくなりますが、目が悪いと、からだも暗くなります。35 ですから、自分のうちの光が闇にならないように気をつけなさい。36 もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、明かりがその輝きであなたを照らすときのように、全身が光に満ちたものとなります。」

33 節の明かりをともし、燭台に置いているというのは、イエス様ご自身のことです。マタイによる福音書ですと、イエス様が山上で説教をされた時に弟子たちに対して、世界の光になりなさいと命じられた時の喩えでありました。けれどもイエス様は今、ユダヤ人の群衆に対して同じ喩えを使っておられます。ここでは、イエスご自身が燭台の光であられて、それを主が既に彼らに輝かせていました。はっきりと神の本質を彼らに見せておられたのです。それでも彼らが、まるで盲目になっているか、あるいは目隠しでもしているかのように見ていないと責めておられます。

もし目が見えなければ全身も見ることができない、と主は言われます。その通りですね、この体の一部分が不自由になれば、体全体を不自由にさせます。それはあたかも、目という窓から太陽光線が部屋の中に入るように、私たちの霊的な目が開かれていれば、全ての面で光が与えられます。そして、36 節にあるように今度は、自分自身にあるキリストの光が満ちて、周囲を輝かせることとなります。ですから大事なことは、自分が神の真理を信仰の目を持って見るか？であります。

## 3B パリサイ派と律法の専門家 37-53

### 1C 外側だけを清める者 37-44

37 イエスが話し終えられると、一人のパリサイ人が、自分の家で食事をしていただきたい、とお願いした。そこでイエスは家に入って、食卓に着かれた。

場面は、食卓の場になります。イエス様が話し終えられた後に、パリサイ人が食事に招きます。かつてパリサイ派のシモンもイエス様を招きましたね。高名なラビなどを招いて、人々を集めて、大事な話題について食事中に語ったりするのが習慣になっていました。ここで、イエス様はパリサイ人のところでも、どこでも招かれたら食事に行かれているというのは、すごいと思います。あたかもイエス様はパリサイ人に敵対しているように見えるかもしれませんが、決してそうではありません。だれもが救いの知識に至ることを願っておられます。

38 そのパリサイ人は、イエスが食事の前に、まずきよめの洗いをなさらないのを見て驚いた。39  
すると、主は彼に言われた。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や皿の外側はきよめるが、  
その内側は強欲と邪悪で満ちています。40 愚かな者たち。外側を造られた方は、内側も造られ  
たではありませんか。41 とにかく、内にあるものを施しに用いなさい。そうすれば、見よ、あなた  
がたにとって、すべてがきよいものとなります。

烈火のごとく叱責されているイエス様ですが、これを今までは、裁きの宣告であるように読んで  
いました。けれども、心を落ち着かせると、そうではなく、イエス様ご自身はこうでもしなければ、福  
音を伝えられなかったのだということが分かってきました。ご自身が批判されたことに腹を立てた  
のではなく、きよめの洗いをするかしないか、という、律法には書かれていないしきたりにとらわれ  
ていて、肝心の内側のきよめをなおざりにしていたからです。それで、彼らが盲目になっていたの  
です。先の目が暗くなっていた、というところ です。

福音は、心の一新を取り扱います。神が御霊によって私たちに心の一新を与られます。主が、  
「愚かな者たち。」と言われているのは、彼らを見下しているのではなく、全く頭を使っていない、外  
側だけでなく、内側も造られた神を信じているでしょう、その内側が新たにされたら、今の外側のこ  
ともきよめられるでしょう！と嘆願するように、訴えておられるのです。

42 だが、わざわざだ、パリサイ人。おまえたちはミント、うん香、あらゆる野菜の十分の一を納め  
ているが、正義と神への愛をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これ  
こそしなければならぬことだ。

イエス様は、「災いだ」を六回、宣言されます。パリサイ派に三回、律法の専門家に三回、使われ  
ます。これは、とてつもない悲痛を表します。胸が張り裂ける感情であり、いわゆる呪っているの  
ではありません。

一つ目の災いは、最も大事な正義と神への愛を忘れていたということです。十分の一の捧げ物  
も大事です。私たちの教会も、十分の一を信じています。つまり、自分に与えられた所得の十分の  
一を献げることは、旧約の律法で命じられていることであり、またイエス様がここで奨励されてい  
ることだからです。しかし、すべての律法に言えますが、その掟自体が目的ではなく、神の正義や、  
神への愛が目的であり、その中で律法の意味合いが推し量られるのです。

43 わざわいだ、パリサイ人。おまえたちは会堂の上席や、広場であいさつされることが好きだ。

二つ目の災いは、自分の地位や、世間体を気にしていることです。

44 わざわいだ。おまえたちは人目につかない墓のようで、人々は、その上を歩いても気がつかない。」

三つ目の災いは、どぎついですが、彼らこそが人が知らないうちに汚れを与えている張本人たちということです。ユダヤ人にとって、死体に触れたら汚れますから、普段は、墓は避けます。ところが、人目につかないので歩いてしまいつの間にか汚れてしまうということがありますが、パリサイ人が最も忌み嫌うことを、敢えてイエス様は用いて、自分自身が汚れの発生源だと咎めておられるのです。

つまり、外側を清めていることによって、内側が放棄されている中で、知られないようにして汚れが広がっていくのです。正論に見えるよなことを掲げて主張して、積極を人々を汚し、滅びをもたらすこともあります。ガラテヤ人への手紙では、律法主義にとらわれてしまった状況がありましたが、パウロはこう警告しています。「5:15 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。」

#### 2C 自分だけを無罪とする者 45-52

45 すると、律法の専門家の一人がイエスに言った。「先生。そのようなことを言われるなら、私たちまで侮辱することになります。」

パリサイ人と分けて、律法の専門家が出てきました。しばしばパリサイ人と律法学者が並べて、書かれていますが、パリサイ人は「敬虔」を求める人々であり、自分たちを律法の遵守によって清く保つ運動が、バビロン捕囚以後のユダヤ教の中で起こってきました。今、その伝統を受け継いでいるのは、正統派ユダヤ教徒です。けれども、それと律法の学者は違います。エズラが学者でした。律法を教えて、人々にその意味を理解させ、神に導く働きをしていた人々です。けれども、パリサイ派のしていることは彼らの解釈に基づくのですから、このような強い反応が来ました。

46 しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本触れようとはしない。」

律法の解釈によって、その教えが細分化していき、人々が到底負いきれないものとなっていました。使徒ペテロが、エルサレムの会議で異邦人に割礼を受けさせるのかどうかという激しい議論で、「そうであるなら、なぜ今あなたがたは、私たちの先祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みるのですか。(使徒 15:10)」と言いました。

ここでの忌まわしさは何か？これは、「重荷のある人の重荷を取るのではなく、さらに重荷を負わせる。」ことであります。イエス様は、「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに

来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」と言われました。そして、わたしのくびきを負いなさい、それは軽いのだと言われました。主の命令は重荷とはなりません。私たちは、このキリストにあって人の重荷を互いに負うのです。「互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。(ガラテヤ 6:2)」

47 わざわいだ。おまえたちは預言者たちの墓を建てているが、彼らを殺したのは、おまえたちの先祖だ。48 こうして、おまえたちは先祖がしたこと証人となり、同意しているのだ。彼らが預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。

ここでの忌まわしさは、「迫害者になっている」ということです。使徒の働きでステパノが、サンヘドリンにおいて、アブラハムから始まる歴史を語りました。ヨセフの時に、彼が兄たちによって憎まれ、エジプトに奴隷として売られました。モーセの時に、彼はイスラエル人から拒まれて、四十年間、荒野で羊飼いをしていました。神の預言者たちが、イスラエルの民によって拒まれた歴史を述べていったのです。ですから、律法の専門家は預言者たちの墓を建てているけれども、それは先祖たちも預言者たちの血を流した同じ迫害を行っていたことを証明しているのだ、ということです。彼らは、イエスを十字架につけ、そして神の使徒たちを後に迫害する者たちになっていきます。

49 だから、神の知恵もこう言ったのだ。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者たちを殺し、ある者たちを迫害する。50 それは、世界の基が据えられたときから流されてきた、すべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。51 アベルの血から、祭壇と神の家の間で殺されたザカリヤの血に至るまで。』そうだ。わたしはおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる。

神の知恵だとして、引用してお語りになっているのですが、これはイエス様ご自身の言葉です。何かと言いますと、「罪を捨てて、神に立ち返ることを拒む」私たちの肉の性質であります。聖書の初めから終わりまで、肉に属する者が、御霊に属する者を迫害した歴史になっています。アダムが罪を犯して、それから生まれたカインが、自分の行ないを、弟アベルのいけにえによって否定されて、それでアベルを殺しました。キリストによる血を流すところの犠牲で罪が赦されるのですが、それを認めたくないの、かえってその罪の赦しを否定するのです。

旧約聖書はマラキ書が最後になっていますが、ユダヤ人の聖書は歴代誌が最後になっており、その流血の迫害はザカリヤのところで終わっています。祭司エホヤダによって幼い時から主にあって育ったヨアシュが、エホヤダが死ぬと側近が彼を伏し拝みはじめました。それをエホヤダの子ゼカリヤが預言をして、それは良いことなのか？と警告すると、王は陰謀によって彼を殺しました。しかし、祭壇と聖所の間のところで彼を殺したのです。つまり、初めから終わりまで血を流す歴史に塗られているのだ、ということです。

52 わざわいだ、律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を取り上げて、自分が入らず、入ろうとする人々を妨げたのだ。」

最後の災いは、「人を神の国に入らせない」というつまずきであります。自分自身も御国に入ることができませんが、それだけでなく入ろうとする人々までが神の真理から離れるということがあっていいのか？ということです。福音の中に生きる者は、他の人々が福音の真理以外でつまずくことがないように、最善の注意を払います。ところが、自分の拘りで義を得られるはずがないのに主張し、自分も入れないのにそうやって、人々にも福音を信じるようにさせない妨げと造っている、ということです。

### 3C 激しい敵意 53-54

53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者たち、パリサイ人たちはイエスに対して激しい敵意を抱き、多くのことについてしつこく質問攻めを始めた。54 彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと狙っていたのである。

イエス様が食事の席を立ち、そこを出て行かれました。実際に食事をどれだけしておられたのか、気になります。(笑)それはともかく、激しい敵意を抱いているとのこと。私たちは、律法主義に気を付けなければいけません、次にイエス様は「パン種」と呼ばれます。敵意や妬みがあるのに、自分たちは正しいことをしている、神に仕えているのだと自負してしまいます。自分が妨げの石になっていることに対して盲目になっています。

けれども、イエス様は、歯に衣着せず、真っ直ぐにお語りになりました。福音の真理を語られたのです。盲目になっている者に、目を開かせて薬を塗らなければいけない状態でした。聖霊のみが、その人に罪を自覚させることができるでしょう。